

学校生活に根ざした道徳の授業

— 話合いを通して、道徳的価値の自覚を深める —

森 益 子¹

道徳教育の充実が求められ、「考え、議論する」道徳科への転換が図られている。しかし、生徒は思春期特有の悩みや心の揺れを抱え、道徳の授業で積極的に気持ちを語れないことがある。そこで、生徒が道徳的課題を自分事として考えて、主体的に話し合う道徳の授業を構想した。授業実践を通して検証した結果、学校生活に関連した題材を意図的に扱うことが有効であることが明らかになった。

はじめに

今、人格の基盤となる道徳性を育む道徳教育の充実が求められ、小学校、中学校で改善が進められている。それは、他者とともにによりよく生きる力を育むためであり、多様な価値観を持つ人々との対話や協働が重要とされているからである。道徳の時間においては、児童・生徒が主体的に行動できるように内面的資質を高め、よりよい生き方を考え続ける力を養うことが求められている。

しかし、道徳の時間に関しては、「発達の段階が上がるにつれ、授業に対する生徒の受け止めがよくない状況にある」（中央教育審議会答申 2014）と指摘されるように、生徒が積極的に授業に取り組めない実態が報告されている。そこで、生徒が主体的に道徳の授業に取り組み、よりよい生き方を考え続ける力を育むことが大切であると考えた。

研究の目的

学習指導要領に示されている道徳の時間の目標は、道徳的価値及び、それに基づいた人間としての生き方についての自覚を深め、将来出会うであろう様々な場面、状況においても道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践できるような道徳的実践力を育成することである。道徳の時間の目標を実現するためには、生徒が主体的に道徳の授業に取り組み、題材を自分自身の問題として捉えることが大切である。それは、道徳的課題について他者とともに考えを深め、道徳性を身に付けていくことが、よりよく生きるための基盤となるからである。そこで、「考え、議論する」道徳の授業の実現に向けて、生徒が道徳の授業に主体的に取り組むようになる具体的な手立てを見いだすことを研究の目的とした。

1 海老名市立今泉中学校

研究分野（今日的な教育課題研究 道徳教育の充実に関する研究）

研究の内容

1 道徳の時間の課題

昭和 33 年に道徳が教育課程に位置付けられてから、道徳教育の在り方は議論され続けてきた。また、道徳の時間の指導については様々な課題が繰り返し指摘されてきた。平成 26 年 10 月には、中央教育審議会から、「各教科等に比べて軽視されがち」、「資料の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導」、「発達段階などを十分に踏まえず、児童生徒に望ましいと思われる分かりきったことを言わせたり書かせたりする授業」といった課題が挙げられた。そして、平成 27 年 3 月に、学習指導要領が一部改正され、「道徳の時間」を「特別の教科 道徳」として位置付けることや、「道徳的課題を一人ひとりの生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う『考え、議論する』道徳科」へ転換を図ること等が示された。一方、「道徳教育実施状況調査」（文部科学省 2012）では、「指導の効果を把握することが困難」、「効果的な指導方法が分からず」、「適切な教材の入手が難しい」といった課題を、教職員が持っていることが示された。

中央教育審議会から指摘されているような課題のある指導方法による授業が続けば、生徒は学習に対する充実感を十分得ることができない。また、心情理解を通して、道徳的価値を理解することができたとしても、道徳的実践につなげることは難しいであろう。道徳の時間の課題を解決するためには、道徳的価値を理解させ、実践につなげていく授業づくりを考えていく必要がある。

2 研究テーマについて

(1) 学校生活に根ざした道徳の授業

生徒は、多くの人や事物との関わりを通して、様々な考え方で触れ、喜びや葛藤などを感じながら成長する中で、道徳性を育んでいく。ゆえに、生徒にとって学校における人との関わりや様々な学びは、道徳性の発達に大きな意味を持つ。そこで、道徳の授業の題材と学校生活における人間関係や行事、体験活動などの

事柄を関連させれば、生徒が道徳的課題を身近に感じ、学校生活における経験を振り返りながら道徳的課題について、自分の考えを持つことができると考えた。

本研究では、学校生活と関連付けた題材や学校生活の経験から生まれてくる生徒一人ひとりの考え方などをいかした授業を「学校生活に根ざした道徳の授業」と整理した。

(2) 「自分事として捉える」

本研究では、生徒が道徳的課題を「自分事として捉える」ことが、「考え、議論する」道徳の授業に有効だと考えた。なぜならば、道徳的課題を自分に関わる問題として捉えることで、議論する主題に対して問題意識を持つことができるからである。また、生徒が、道徳の授業に主体的に取り組むことができるからである。

(3) 話合いを通して、道徳的価値の自覚を深める

「中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」(文部科学省 2015)には、「中学生の発達の段階においては、ふだんの生活においては分かっていると信じて疑わない様々な道徳的価値について、(中略) 他者との対話などを手掛かりとして自己との関わりを問い合わせ直すことによって、そこから本当の理解が始まる」と示されている。生徒は他者との話合いを重ねる中で、自己や他者の理解を深め、広い視野から多面的・多角的に考えるようになる。そして、自分が気付かなかつた新しい見方を知り、他者の思いに気付くことで、道徳的価値の自覚を深めていくことができる。以上のことから話合いを取り入れた道徳の授業が有効であると考えた。

3 研究の仮説

研究テーマに迫るために、次の仮説を立てた。

生徒に、道徳的課題を自分事として捉えさせて、話し合わせれば、自分自身を振り返り、よりよい生き方を考えていくことができるだろう。

4 仮説の検証に向けて

(1) 関連を図った道徳の授業づくり

ア 生徒の実態を把握し、指導の重点を意図する

1 学期終了時点で、所属校における生徒の実態は、「人の気持ちを考えない発言により、人間関係のトラブルが多い」ということであった。他者との良好な関わりは、生徒の生活を支え心の糧となることから、2 学期の指導の重点を、思いやりを持ち、互いの個性を大切に、よりよい人間関係を築かせることとした。日常生活や学習活動で継続的に道徳教育を指導することも大切であると考え、教員間で共通理解を図った。

イ 道徳教育の全体計画別葉の見直し

指導の重点を踏まえて、他の教育活動と道徳の時間を関連付けるため、道徳教育の全体計画別葉(各教育

活動と関連付けて、道徳の時間の計画を立てたもの)を見直した。具体的には、人間関係を向上させることをねらい、9月下旬の体育祭や10月下旬の合唱コンクールの行事と道徳の時間を関連付けた。生徒は、「思いやり」や「友情」の大切さは理解できている。しかし、実践に移すことは難しい。そこで、つながりのある内容項目「思いやり」、「自他の尊重」、「友情・信頼」を連続して、道徳教育の全体計画別葉に配置した。それは、1時間では限られた場面だけの浅い理解であったとしても、3時間連続することで、それぞれの内容項目を関連させることにより理解を深めることができ、実践につながると判断したからである。

ウ 資料の選定

授業実践に当たり、生徒が資料の内容を自分との関わりで考えられるよう、体育祭、合唱コンクールの行事との関連を意識して、次の資料を選定した(第1表)。

第1表 資料の選択理由とあらすじ

内容項目	「思いやり」 (指導時期: 体育祭後)
選択理由	体育祭の練習の中で、生徒は他者の言動に思いやりや感謝の気持ちを抱く。この機会に、思いやりについて考えを深めさせる。
資料名	「カーテンの向こう」(作者 堀内秀明)
あらすじ	中東のある病院での出来事。重症患者ばかりの病室で窓際に横たわるヤコブだけが、カーテンの向こうの様子を見られ、周りの人に外の明るい様子を伝える。あるとき、ニコルが場所を変わるように頼むが、ヤコブは頑として譲らない。主人公の私はヤコブが死ねばいいと思うようになる。ヤコブが死に、私が窓際に移った。期待に打ち震えて見た窓の外は、冷たいレンガの壁であった。
内容項目	「自他の尊重」 (指導時期: 合唱コンクール前)
選択理由	合唱コンクールの練習中に、声の大小をめぐり生徒間トラブルが起こりやすい。見方を変えることにより、人の良い面を考えさせる。
資料名	「まるごと好きです」(作者 工藤直子)
あらすじ	筆者は、中学生の頃から「出会った人をまるごと好きになる」という考え方を身に付けていた。人は良いところも悪いところもあり、どの部分を見るかで別人のように変わってしまう。結局、自分の見方次第であり、筆者は「まるごと好きになる」という自分に合った方法で、たくさんの人と好意的に付き合っている。
内容項目	「友情・信頼」 (指導時期: 合唱コンクール後)
選択理由	合唱コンクール終了後に、生徒は他者との交流を通して様々な思いを抱く。友達関係には何が大切なかを考えさせる。
資料名	「違うんだよ、健司」(中学校道徳 文部科学省読み物資料集)
あらすじ	僕のクラスに転校してきた健司は、僕が耕平に対して適当に言動を合わせていることに対して、「そんなの友達と言えるか」と言う。部活を休み、授業で居眠りするようになり、様子が変わった耕平を心配して、健司は三人で親戚の家に遊びに行こうと誘う。そこで出会った健司の祖母とその友達の会話や様子を見て、三人は、初めて心を開いて語り合い、相手を理解するようになる。

(2) 自分の考えを表現させる工夫

他者の様々な考えに触れることで、生徒は視野を広げられ、自分の道徳的価値を見つめ直すことができる。そこで、発問や友達の考えに対して自分の考えを持ち、友達と活発に話し合えるように以下の工夫を試みた。

- ・賛成、反対という自分の立場を明確にさせる。
- ・少人数で考えを伝え合わせる。
- ・自分の考えに理由や例を挙げて、話をさせる。

具体的には、発問に対する自分の考えをワークシートにまとめさせた。また、賛成か反対かとその理由を書かせることも行った。授業の終末部分では、自分を振り返らせ実践意欲につなげるため、生徒が今後の生活にいかそうと考えていることをワークシートにまとめさせた。

5 授業実践

第2学年の全クラスに対して、生徒が資料に内包される道徳的課題を自分事として捉えて、話し合う授業実践を行った。前述した内容項目と資料を扱って、授業を3回連続させることで、生徒同士の人間関係を向上させる願いを持って取り組んだ。なお、3回目の授業は、内容項目を連続させたことによる生徒の変容を見取るために、検証授業として位置付けた。

(1) 授業実践1 「カーテンの向こう」

ア 学習活動の流れと生徒の反応

ねらい：人との関わりを通し、相手の立場を尊重し思
いやりを持って接する、温かい心情を養う。

導入部分では、体育祭の練習の中で思いやりを感じた場面を思い起こさせた。体育祭の大縄練習で励まされたことから、多くの生徒が他者から思いやりを感じていた。終末部分では、学校生活で他の人に思いやりを、どのように示すことができるかを考えさせた。

生徒の感想からは、「友達に対して、気付かれない思いやりを大切にしたい」、「相手が自分の言葉や態度で喜ぶ、そんな思いやりを大切にしたい」など、友達に思いやりを示そうという意欲が見取れた。

イ 題材に体育祭を関連付ける

題材に体育祭を関連付けたことで、生徒の思いやりについての関心を高めることができた。体育祭の練習中の言葉掛けや場面を思い出させることで、生徒を題材に引き込むことができた。学校行事との関連を図った道徳の授業が有効であることが分かった。

(2) 授業実践2 「まるごと好きです」

ア 学習活動の流れと生徒の反応

ねらい：見る角度を変えることで人の良さを発見でき、
人間関係を広げられることを理解させる。また、

違う個性を認め、謙虚に学び合う態度を養う。

導入部分では、自分で理解した資料の内容を全体で共有したことにより、内容理解を深めることができた。

具体的には、生徒が技術科で学んだ投影図の考え方を用いて、内容を理解することができた。終末部分では、授業で学んだことの中から、日常生活にいかそうと思うことをまとめさせた。

生徒の感想から、他者の考えの多様さに驚いたことや、他者の考えに触れて、新たな気付きを見いだした様子が伺われた。生徒の中には、「合唱コンクールの練習で音が外れてしまう人は、見方を変えれば頑張っている人だ」などの感想が見られた。授業の発言やワークシートから、人の考え方は様々であり、他者を大切にしていこうとする態度へと、生徒が変容していったことを見取ることができた。

イ 自分事として捉え、話し合う

導入部分で、資料を自分との関わりの中で捉えさせることにより、展開部分で、自分の経験を基に話し合わせ、生徒の多様な考えを引き出すことができた。しかし、授業の中で生徒が本音を語り、互いを理解し合うには、まだ課題があると思われた。次の内容項目「友情・信頼」で、再度、生徒の実生活と重ね合わせて深く考えさせていこうと考えた。

(3) 検証授業 「違うんだよ、健司」

ア 検証授業の概要

実施日：平成27年11月2日

対象：所属中学校 第2学年4組

主題名：「友情・信頼」

ねらい：自分とは違う良さを持った相手を理解しようとする姿勢が友達関係を深めていくことに気付かせ、友達を信頼し、互いに励まし合い高め合おうとする道徳的実践意欲を育てる。

イ 検証授業の内容

(ア) 自分事として捉えさせる

授業前に実施した友達に関するアンケートでは、「友達はあなたにとってどんな存在ですか」という質問に対して、「本音を言い合える存在」、「支え合える存在」とねらいに迫る回答を示した生徒は38人中、僅か4人であった。友達との関係を深めることを躊躇する生徒が多くいることから、相手を思いやり、心から支え合える友達関係を築くことを学んでほしいと考えた。

教師が資料を範読した後、導入部分で、「登場人物の3人の付き合いをどう思うか」という発問をした。生徒の主な回答は、「ぎこちない」、「表面的」、「最後は仲が良くなった」などであった。また、「悩みを言い合えて、支え合える関係」と具体的な価値理解を示せたのは4人で、「気を遣い過ぎ」、「ぎこちない」など価値理解が深まり始めている生徒は13人であった。生徒は自分自身の友達関係と重ね合わせ、自分事と捉えている内容をワークシートに書いていた。

このクラスの実態として、多くの生徒は、日頃、学校生活の中で、友達に表面だけ合わせて自分の言いたいことを言えていないということが見られる。そこで、

資料と自分の友達関係を関連付ける意図で発問を設定した。以下は授業記録である。(○印は発問、Sは生徒、Tは教師)

○：「僕が『適当に合わせた付き合いが最高』と言うのをどう思いますか。日常生活で友達と一緒にいる場面を考えてみよう。自分だったら適当に合わせますか。」

S 1：友達に合わせる。面倒なことを避けるため。
(間が空くが、生徒が考える時間を確保する。)

T：S 1さんの意見につなげよう。

S 2：私は、本当に仲が良かったら自分の意見を言った方がいいと思う。

S 3：S 1に賛成だけど、犯罪とかになるなら自分の意見を言わなければいけない。場面によって判断する。

T：なるほど。他には。「適当に合わせる」、「適当に合わせない」、どちらの立場ですか。

S 4：S 1さんと同じで、友達と意見がぶつかって関係がギクシャクするようなら、友達に合わせる。

S 5：どちらが正しいかは分からぬのだから、自分の意見を伝えるのが本当の友達だ。

S 6：合わせるのもいいが、友達だったら相手のことを考えた方がいい。

T：S 6さんは、友達に合わせて付き合うの？

S 6：適当に合わせない方。

T：もう一度、説明して下さい。

S 6：適当には合わせない。自分の意見をしっかり持たないと、相手にも軽く見られてしまうから、自分の意見をちゃんと言う。

S 7：本当の友達なら小さなことでは関係は壊れない。
だから、自分の意見を伝えた方がいい。

(自分の立場を示すために、クラスの生徒に手させると、3分の1が適当に合わせると答え、他の生徒は適当に合わせないと答えた。)

T：友達との関係を重視して合わせていくか、自分の思いをはっきり伝えていくか、友達関係は難しいものです。

S 3が言った意見は、中立の立場でこの話合いの場を上手くまとめられるものである。しかし、他の生徒の考えも引き出すため、自分なら「適当に合わせる」、「適当に合わせない」のどちらの立場なのかを明確にするように指示した。S 1、S 4の友達に合わせる考え方、人間関係を円滑にする上で多くの生徒に見られるので、他の生徒も共感したと思われる。S 6の意見は、思いやりについて具体性に欠けたので説明を促したところ、S 6は、相手のことを考えるという行為を、まだ他律的に捉えている説明をした。そして、S 5、S 7から相手との対等な関係を築くため、または自分の意思を持って付き合う大切さが説明され、話合いが収束した。

(1) 道徳的価値の自覚を深めさせるために

資料の後半部分では、3人が健司のおばあちゃんたちの仲の良さに触れ、互いの気持ちを理解するようになる。耕平の心情を理解させるために「どうして耕平はポツリポツリと悩みを打ち明けることができたのか」という発問を投げ掛けた。

生徒は、「健司と僕の2人が気に掛けてくれたから」「おばあちゃんたちみたいに仲良くなりたかったから」、「耕平は、言った方が2人のためにもなると思ったから」、「僕が変わったから耕平も変わった」という耕平の心情を理解した。さらに、最後の発問を通して、友情の深まりには何が大切であるかを考えさせた。この授業で自分の考えを発言できていない生徒に配慮し、2人組で考えを伝え合う活動を取り入れた。以下は授業記録である。

○：「健司が教えてくれた大事なこととは何ですか」
(2人組で考えを伝え合う活動の後)

S 8：友達を思う優しさや、友達を気遣うこと。

S 9：初めは気にしなかったけど、健司に言われたことで、自分の意見を相手に伝えるのが大事だと考えようになったこと。

S 10：友達に本音を伝えること、それが本当の仲の良い友達だということ。

S 11：相手の気持ちを考えること。それで3人とも互いが良い方向に変わっていたこと。

S 12：健司は3人の信頼関係を作りたくて、思いやりを持って2人に接した。そのような思いやりの大切さを教えてくれた。

T：自分の思いを相手に言うことだけでなく、友達という相手の思いを理解することも大事です。一緒にいるから友達と言えるのですか。その友達とどんな心でつながっているのかが大切です。

生徒は友達との様々な体験を通して、時間を掛けて互いを理解しながら友達関係を深めていく。友達とは対等な関係であり、苦しいときには支え合い、楽しさを分かち合うことで、仲が深まっていく。検証授業では、資料を読み、話合いを通して、友達の大切さを考えた。そして、相手を思いやり、理解し合うことで本当の友情が育まれていくことを生徒が理解できるようになっていった。

6 生徒の変容

(1) 生徒の授業での発言から

検証授業の実践事例を示したクラスは、合唱コンクール前の道徳の授業までは、生徒の発言が少なく、つながりのある意見が出されることも少なかった。しかし、行事前後の自分たちの友達に関する意識を比較させたことで、検証授業時の生徒の発言意欲が高まった。そして、授業の中の話合いでは、自分たちの日常生活の様子を出し合いながら、考えを伝え合うことができ

た。

生徒が人との関係に様々な思いを抱き始めた時を逃さず、道徳の授業の題材と学校生活の関連を図ったことで、生徒が道徳的課題について、自分の考えを持つことができた。

(2) 生徒のワークシートから

授業の終末部分に、これまでの友達関係を振り返らせ、授業で学んだことをワークシートにまとめさせた。

次の記述は、生徒のワークシートからの抜粋である。

- ・3人のような関係はとてもうらやましいと思いました。これから、もっと本音で話せる友達を作っていくたいし、自分も本音で話してもらえるような人になりたいと思いました（生徒A）。
- ・少し適当に付き合う部分もあったから考えさせられた。自分の周りには本当の友達がいるかを考え始めた。もう少し積極的に友達に意見を言えるようになりたい（生徒B）。
- ・私は友達とたくさん本音を言い合っている関係なので、この関係がとても良いことを改めて感じました。友達を大切にしていきたい（生徒C）。
- ・人に合わせてしまう付き合いもあるけど、本当のことを言い、隠しごとや嘘のない友達関係の方が、悩みも相談できるから大事だと思った（生徒D）。

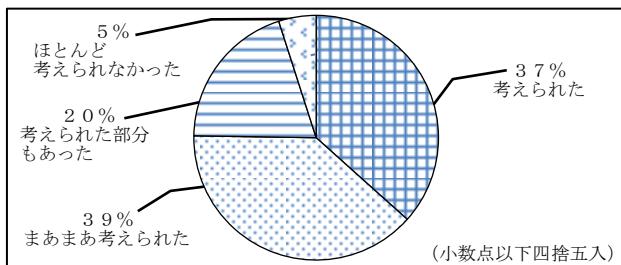
生徒A、B、Dは、自分の友達関係を見つめ直している。生徒Cは改めて自分自身の友達関係を振り返り、良い関係と感じたことを書いている。このように、個々の生徒が自分を振り返り、自分の課題を見いだしていることを見取ることができる。また、本時のねらいを理解し、生徒A、B、Cの下線部に書かれたような実践意欲を示した生徒は28人になった。

このような生徒の変容は、資料を自分事として捉え、話合いを通して友達の考えを知り、自分は何を大切にすべきかを主体的に考えることができたからである。

(3) 授業後のアンケート

ア 自分事として捉えられたか

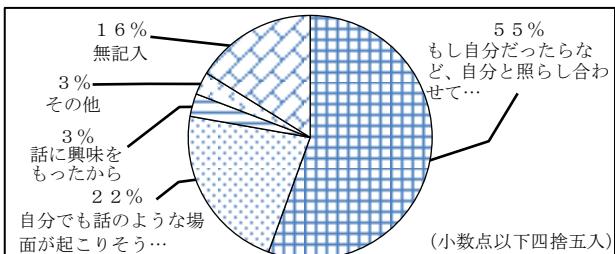
3回連続の道徳の授業を全クラスで行った後、第2学年177人を対象にアンケートを実施した。授業内容を「自分事として考えられたか」という質問に対して、「考えられた」、「まあまあ考えられた」と回答した割合は計76%であった（第1図）。



第1図 自分事として考えられましたか (N=177)

自分事として「考えられた」、「まあまあ考えられた」と答えた生徒の主な理由とその割合は、「もし自分だったらなど、自分と照らし合わせて考えられた」

が55%、「自分でも話のような場面が起きたから」や「実際にそういう場面があった」という生徒が22%であった（第2図）。

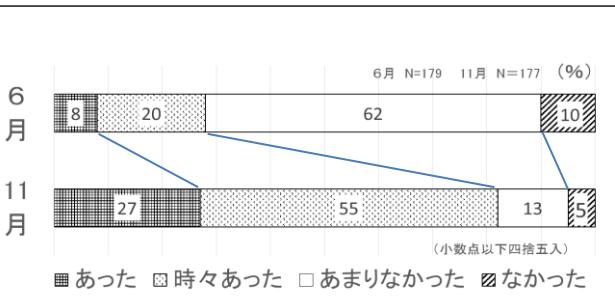


第2図 自分事として「考えられた」、「まあまあ考えられた」と答えた生徒の理由 (n=134)

学校生活に関連させた題材を意図的に扱ったことで、資料に内包される道徳的課題を自分事として捉えたことを見取ることができる。

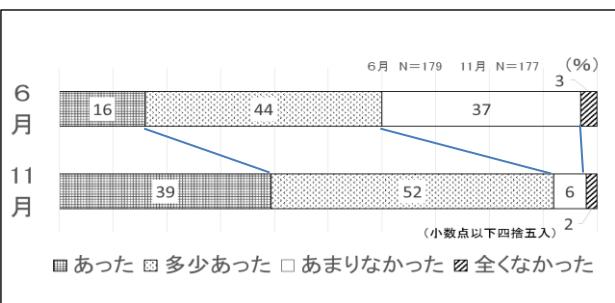
イ 話合いによる生徒の変容

6月と11月に、道徳の授業に関する生徒アンケートを実施した。「道徳の授業で自分の考えが変わったり、迷ったりしたことはありますか」という質問に対し、11月は計82%の生徒が「あった」、「時々あった」と回答し、6月と比較して54ポイント増加した（第3図）。



第3図 道徳の授業で自分の考えが変わったり、迷ったりしたことはありますか

生徒の記述から「人の意見に納得して、心にストンと当たってはまった」や「他の人の意見を聞いて、違う見方ができると気付いた」など、他者の様々な考え方から気付きを得たことが分かる。また、「道徳の授業で学んだことはありますか」という質問に、「あった」、「多少あった」と回答した生徒が計91%に達した（第4図）。



第4図 道徳の授業で学んだことはありますか

6月の時点では、生徒は他者の考え方を意識することは少なかったが、11月には他者との話合いを通して、自分を見つめ、新たな考え方方に気付くように変わって

いった。そして、授業での振り返りや他の教育活動における学習を重ねた結果、道徳の授業を自分自身の生活に役立つ授業として感じていくようになったといえる。

研究のまとめ

1 研究の成果

生徒が道徳的課題を自分自身の問題として捉え、話し合うためには、本研究で示した三つの手立てが有効であることが分かった。

まず、各教育活動と道徳の授業との関連を図った道徳教育の全体計画別様を見直したことにより、学校生活に根ざした道徳の授業を構想することができた。

次に、資料を自分事として捉えさせ、学校生活に関連させた発問を投げ掛けることで、生徒が道徳的課題を自分の生活に関わる事として捉えられた。そのことにより、生徒は、授業で主体的に考え、他者と話し合うことができた。

最後に、授業における具体的な取組として、話合いの中で生徒の考えを表現させた。本研究で取り組んだ「自分の考えを話しやすくする工夫」が有効であったといえる。また、生徒の思考を大切にし、生徒の本音に共感することで、話合いの内容を深めることができた。その結果、生徒は他者の様々な考え方から、自分を振り返ることができた。さらに、他の教育活動を通して、よりよい生き方を考えるようになったといえる。

以上、述べてきたように、本研究の手立てを用いて道徳の授業を行えば、生徒が道徳的課題を自分事として捉えて、主体的に話し合うことができるといえる。

また、今回の授業実践と検証授業において、つながりのある内容項目の授業を3回連続することで、生徒の道徳的価値の理解が深まった。生徒が学んだことを実践につなげた事例として、友達に自分の考えをはつきりと伝え、人間関係を修復したことが所属校の第2学年の教員から報告された。

これらのことからも、生徒に主体的に考えさせ、話し合わせることができれば、生徒が道徳の授業に充実感を持つことができ、生徒の道徳的実践力を養うことにつながっていくことが分かった。

2 今後の課題

検証授業を終えて、今後の人間関係にいかせると意欲を示した生徒とは対照的に、授業で学んだことは全くなかった、と答えた生徒が僅かにいた。その主な理由は、長い文章を読むことが嫌いであるということであった。道徳の時間は、資料の内容を理解する中で、話の展開を想像したり、登場人物の思いに共感したりする活動が欠かせない。また、授業の終末部分で、ワークシートに自分の振り返りを記録として残す活動も

ある。

このような活動を成立させるには、生徒が資料を読んで理解する力や、自分の考えや判断を言葉で表現する力を養うことが大切になる。そのためには、他教科と連携した言語活動を更に充実させることが大切である。同時に、授業の題材となる資料を探り続け、生徒が主体的に関わる道徳の授業の工夫をしていく必要がある。

おわりに

本研究では、生徒が題材に内包される道徳的課題を自分事として捉えて、「考え、議論する」道徳の授業を構想してきた。授業実践では、特別な資料を用いたわけではなく、一般的な読み物資料を自分事と捉えさせることで、話合いへの関心を高めさせることができた。また、教員間で指導の重点を共有したことにより、指導の効果を上げたといえる。このような工夫は、どの中学校においても実践できることである。

そして、何よりも大切なことは、毎回の道徳の時間を大切にして、教師と生徒が道徳的課題と一緒に考え続けることではないかと感じている。

引用文献

- 中央教育審議会 2014 「道徳に係る教育課程の改善等について（答申）」 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/10/21/1352890_1.pdf (2015年7月取得)
- 文部科学省 2015 『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/07/29/1356257_2.pdf (2015年9月取得)

参考文献

- 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 道徳編』
日本文教出版
- 文部科学省 2012 「違うんだよ、健司」（『中学校道徳 読み物資料集』）
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2012/03/16/1318784_5.pdf (2015年7月取得)
- 垣内秀明 2012 『カーテンの向こう』 http://www.tos-land.net/teaching_plan/contents/2107 (2015年7月取得)
- 工藤直子 1996 『まるごと好きです』 筑摩書房